高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.18

高知県立文学館

●「霧の朝（高岡郡窪川町）」（写真提供／杉野節子）

リレー随筆⑱　寅彦と宇吉郎を若い世代に ――神田　健三

今年高知では、県立文学館の開館五周年などの節目に、寺田寅彦に関連のある企画がいくつも行われるとのことです。このことは、中谷宇吉郎を通じて寅彦を尊敬する私にとっても、ご同慶の至りです。二年前の宇吉郎の生誕百年では『寅彦と宇吉郎の絵画展』を加賀市で開催し、高知県立文学館から寅彦の絵を多数お借りしました。今年春には、今度は高知の文学館で同じような展示が行われました。＜寅彦の高知＞と＜宇吉郎の加賀＞の交流が具体的に進展していることを嬉しく思います。

宇吉郎は「もし先生を知らなかったら、私は今日とはまるでちがった線の上を歩いていたことだろう」（「寺田先生の追憶」）と書いているように、宇吉郎は恩師の寅彦から、科学、芸術から人生まで、強い影響を受けました。そして、寅彦の考え方をよく吸収し、宇吉郎らしく展開していきました。

宇吉郎は、寅彦について沢山の随筆を書いています。例えば「先生を囲（かこ）る話」に収められた「続」も含めて四十二の小話には、実験室や応接間などで話された、機知に富む寅彦の雑談の様子が再現されています。それが醸し出す雰囲気は実に好ましく、これが寅彦流の教育なのだと納得させられます。又、これらの雑談を記録し、寅彦の没後に随筆にまとめた宇吉郎の才覚にも感心させられます。小話の一つに、「僕が今一番読んでみたいと思うのは、僕が死んだら、皆が僕のことをどういう風に書くだろうということだ。君、何かそれを読む巧い方法がないだろうか」と寅彦が言ったという話がありますが、もし可能なら、あの世の寅彦から、宇吉郎の随筆の感想を聞いてみたいものです。

それは冗談だとしても、未来の寅彦や宇吉郎として育つかもしれない若い世代に、寅彦や宇吉郎の随筆を是非読んで欲しいと、これは本気で思います。例えば、雪の科学館の映画『科学するこころ』でも紹介している次の一節などは、学ぶ者と、指導する者とに、何がしかの示唆を与えるであろうと、私は思っています。

――「ねえ君、不思議だと思いませんか」と当時まだ学生であった自分に話されたことがある。このような一言が今でも生き生きと自分の頭に深い印象を残している。そして自然現象の不思議には自分自身の眼で驚嘆しなければならぬという先生の訓えを肉付けしてくれるのである。

（「指導者としての寺田先生」）

総合的学習など、最近の教育界の新しい動向を考えればなおのこと、若い世代に寅彦や宇吉郎の視点が伝わり、それが生きるヒントとして役立つことを期待したいのです。

（中谷宇吉郎雪の科学館館長）

◆次回企画展によせて◆

2002年11月3日(日・祝)～2003年1月5日(日)

「寺田寅彦展 ―天然に育まれし眼差し―」

寺田　寅彦（1878～1935）

生まれたままの人間はみんな詩人であると同時に科学者である。殊に、田舎の汚れない天然の中に育まれた子供はそうである。

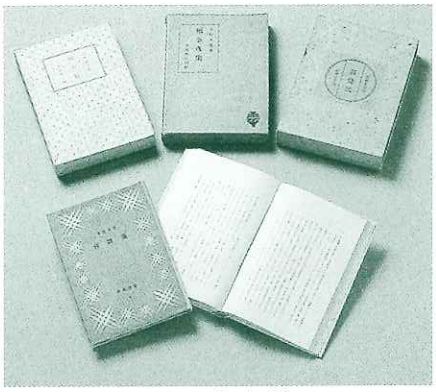
人の世の教えと掟は、詩人と科学者をなし崩しに浮き世の人に変えてしまう。尤もらしい、申し分ない大人が出来上がる頃には、子供の美しい夢と尊い驚きはあらかた消えてしまう。

ただ、特別に鋭い感じやすさと、根強い尋ね求める心を持った僅かの人のみが、子供の中にいる詩人と科学者を守り立てて持ちこたえる。

（『忠雄短編集』「はしがき」より）

寺田寅彦（一八七八～一九三五）は、物理学者として気象、海洋、地震など多方面にわたる研究を行い、その研究の対象は、日常何気なく見過ごしがちな身辺の事象にまで及んでいます。

寅彦は、こうした物理学研究を続けながら、芸術に親しみ、また、自らもヴァイオリンなどを奏し、絵筆をとり、随筆や俳句、詩歌など創作しています。なかでも随筆は、寅彦が〝科学者が、科学者として自己を欺瞞することなくして「創作」し得るために取るべき唯一の文学形式〟（「科学と文学」）と述べているように、寅彦の芸術の中心とされるものでしょう。



書　籍（初版本）

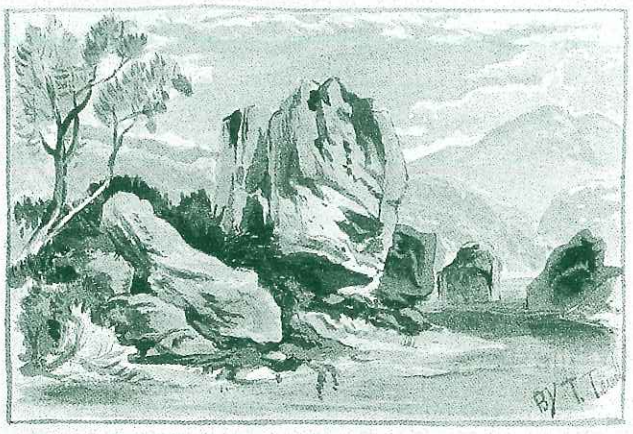
物理学者としての視点を主軸として寅彦の中で科学と芸術は、共に美しい真なるものとして一体化しているように見えます。そして、その随筆は考えることの静かな楽しみを思い出させ、また、感性の慈雨となる何かが間から湧き出てくるように感じられます。

寅彦の科学と芸術の共存は、どこから生まれ、育まれたのでしょうか。

その一つの答えとして冒頭に『忠雄短編集』「はしがき」（大正十三年十一月）を一九九七年刊行の『寺田寅彦全集』第九巻から引用してみました。（原文はローマ字で書かれています。）

寅彦は、「特別に鋭い感じやすさと、根強い尋ね求める心」によって科学と芸術を内に留めることを意識し、それを成しえた人と言えるでしょう。

寅彦の「汚れなき天然」たる田舎は、少年期を過ごした高知を中心とした自然の中にありました。「子供の美しい夢と尊い驚き」を持続させる人物との出会いも見過ごすことは出来ません。なかでも、熊本の第五高等学校で出会う田丸卓郎と夏目漱石は、寅彦に重要な影響を与えています。

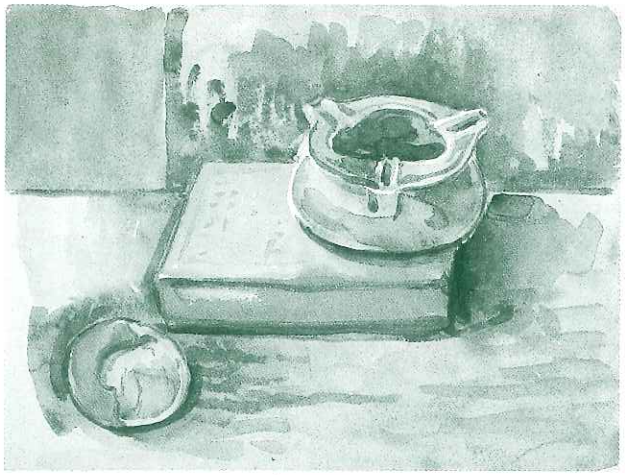


奇岩のある風景

寅彦は、第二学年の学年試験の後、不首尾だった同郷同窓の友人のために先生から「点を貰う」運動委員の一員となり、二人の私宅を訪れます。この訪問により、田丸卓郎からはヴァイオリンの、夏目漱石からは俳句の扉が開かれることになります。そして、田丸との交流は、中学校時代から興味を持ち始めていた物理学への道を自らの意思として選びとる転機となりました。

寅彦は〝理科大学物理学科の課目として教わったものが「物理学」だとすると、その基礎になるべき「物理そのもの」とでも云ったようなものを、高等学校在学中に田丸先生からみっしり教わったというような気がする。この時に教わったものが、今日に到るまで実に頭に沁み込み実によく役に立ち、そうしていつでも自分の中で活きてはたらいているのを感ずる。〟（「田丸先生の追憶」）と記し、夏目漱石からは〝色々のものを教えられた。俳句の技巧を教わったというだけではなくて、自然の美しさを自分自身の眼で発見することを教わった。同じようにまた、人間の心の中の真なるものと偽なるものとを見分け、そうして真なるものを愛し偽なるものを憎むべきことを教えられた。〟（「夏目漱石先生の追憶」）と記しています。田丸卓郎と夏目漱石という二人の恩師は「汚れなき天然」に育まれた寅彦の出会ったもう一つの「汚れなき天然」であったともいえるのではないでしょうか。

一八九六年、高知県立尋常中学校を首席で卒業した寅彦は、無試験で熊本の第五高等学校に進学しました。


本に灰皿

五高時代の寅彦は、ヴァイオリンを密かに独習して演奏したり、漱石宅に集まった学生を中心とした俳句結社「紫溟吟社」に参加したりするなか、『ホトトギス』に投稿し始めています。

一八九九年、五高を卒業し東京帝国大学理科大学物理学科に進んだ寅彦は、漱石の紹介により正岡子規を訪ね、物理研究を着々と進めながら文学への道もゆっくりと歩んでいます。

一九〇〇年春、十九歳の時に結婚した妻・夏子を郷里から呼び寄せ一緒に暮らすようになるのですが、その年末、夏子は喀血し、翌春には、療養のため郷里へ戻ることになります。そして、寅彦も肺尖カタルを患い、一年間休学。離ればなれの療養生活の末、夏子は一女・貞子を形見に二十歳の生涯を閉じます。東大講師となった一九〇四年には高浜虚子の勧めで『ホトトギス』の文章会「山会」にはじめて参加。一九〇五年の『ホトトギス』に掲載された「団栗」は、夏子と貞子への哀惜に満ちた作品であり、同じ年に発表された「竜舌蘭」とともに初期の創作的な佳品として評価されています。同年八月には郷里で浜口真澄の娘寛子（ゆたこ）と再婚。後二男二女を授かることとなります。

一九〇九年より二年間欧州に留学し宇宙物理学の研究を深めながら、欧米各国の地象物理学を調査しています。また、この時の漱石への通信は数回にわたり『東京朝日新聞』に掲載されました。

帰国後の寅彦は、水産講習所で海洋学の研究を委嘱され、宇宙物理学、気象学の調査研究を行い、また、大学での物理講座の担任等もこなしながら、研究を深めてゆきました。一九一七年には、「ラウエ映画の実験方法及び其説明に関する研究」に対して帝国学士院より恩賜賞を授与されています。

しかし、寅彦の三十代後半～四十代前半にかけては、身辺の不幸が重なります。一九一三年には父・利正を、十四年には甥・別役励夫を、十六年には師・漱石を亡くし、十七年にはあろうことか妻・寛子までも突然の病で失うこととなりました。そして、寅彦自身も東京大学理科大学教授となった一九一六年末に胃潰瘍を発症。この胃潰瘍によって十九年末に吐血し、翌二十年から二十一年にかけて、静養のため大学を休むことになります。

この頃から少しずつ本格的な随筆を書くようになり、〝吉村冬彦〟の筆名が使われるようになります。津田青楓との交流により絵画への造詣を深め、病の回復期には写生による油彩画等の作品に取り組みました。

二十一年十一月に大学に復帰。翌年には海軍省の嘱託により恩師・田丸卓郎と航空船に関する調査として飛行船焼失の原因究明を行っています。二十三年九月一日は、津田青楓と二科会展覧会を観覧中に関東大震災となり、震災後、地震に関連した様々な調査に東京市内外を奔走します。この年一月には初の随筆集『冬彦集』、二月には『藪柑子集』が刊行されています。

一九二四年には理化学研究所、二十六年には地震研究所の所員として研究を続け、二十九年頃から映画をよく観るようになり、『帝国大学新聞』に映画批評を寄稿し、二十九年には随筆集『万華鏡』が三十二年には『続冬彦集』を刊行。

晩年の随筆には、少年期の高知での想い出などを題材にしたものが少なからず書かれるようになります。

寅彦自身は〝小生はいわゆるペシミストという者ですが、自分の環境について不平不満はいくらでもありますが、何一つ人に自慢する気になれるものはありません。西洋に居た時でも西洋人に対して国自慢をする日本人には閉口しました。現在でも、人が自分の郷里の自慢をするのを聞いていると、どうも不愉快です。〟（大正八年三月『渋柿』「名所名物　処自慢」より）と悲観主義者として現実の「環境」への不満を述べていますが、晩年の随筆には〝淡い「時の悲しみ」〟としての故郷への思いが漂っています。

今回の展覧会は、寅彦独特の眼差しから描き出される世界を探り、郷里・高知を取り上げた随筆を中心に、書簡や絵画等も交えてご紹介いたします。

東大理科大学２年の寅彦

＜関連企画＞

寅彦の蓄音機を聴く
日時：11月16日（土）午後１時半～
場所：文学館ホール
定員：100名（当日先着）
◆入場無料

寺田寅彦文学散歩
〈高知から須崎へ〉
月日：11月30日（土）
定員：50名（葉書申込み・先着順）
募集期間＝11月１日～11月15日
※葉書に住所・氏名・年齢ご記入の上
高知県立文学館まで
◆参加料無料（飲食代は別途）

記念講演会
日時：12月８日（日）
午後２時～３時30分
場所：文学館ホール
定員：100名（当日先着順）
◆入場無料

ギャラリー・トーク
日時：11月28日（木）、12月21日（土）
１月５日（日）
各日午後２時～３時
場所：２階企画展示室
展覧会担当学芸員
◆入場に観覧券が必要です。

学芸員メモ

田岡典夫 没後20年展 を開催して

「1924年」大正13年夏、友との写真、前列左が田岡典夫

一枚の写真

「1924年」とのみ書かれた一枚の写真がある。中学生時代学友と一緒に四人が写った写真である。左下に「WADA」とあり和田写真館での撮影と思われる。一九二一年四月県立一中（現・高知追手前）に入学した彼らは、その春から制服が和服から洋服に変わったとあるが、大部分の先輩は和服でもあるし、和洋混在していたようだ。この写真に写っている四人も、右二人は詰め襟の学生服、左のもう一人と前列左の典夫は和服（白絣）である。白絣―季節は夏。

よくご覧いただきたい。典夫の制帽だけに、もう既に白線は無いのである。六稜の帽章は、まだ有る。そう、これは典夫中学四年の夏、いわゆる「教師殴打事件」で城東中学退学が決まり、親しかった学友との別れの記念に撮られた、わけある一枚の写真に違いない。（注…一九二二年から「城東中学」と校名変更）。

典夫の肩にかけられた、いたわるような友の手も、憂いを含んだ眼差しや、ちょっと傾けた首すじにも、一抹のさびしさがこもっている。典夫は、というと、きっと結んだ唇、真っ直ぐに正面を見つめ、友との別れは惜しみながらも、ある決意が感じられる。

土佐学びは「純信お馬」から

「土佐屋さん」と呼ばれるほど、土佐のことを、ふるさと土佐の人々のことを書き続けた作家田岡典夫であった。処女作の一つとも思われる「万吉としばてん」には「純信お馬」も出てくれば「坂本龍馬」も出てくる。幼少時代しばしば過ごした種崎の砂浜や松林への郷愁も綴られる。

彼の土佐学びは「純信お馬」から始まったようだが、幕末維新の有名無名の人々、関ヶ原の戦いをくぐって土佐へやってきた人々、権力を掌中にした人々、敗残者たち。武芸を守り、或いはその学問を追究した武士たち、底辺で近世土佐を支えた商人や民衆たち、豊かな土佐建設に我が身を呈した人々…彼が描かなかった土佐人を数える方が、描いた人々を数えるより難しいのでは、と思われるほどである。晩年の大作『小説野中兼山』はその集大成でもあった。

「土佐もの作家」の第一人者

思えば田岡典夫ほど、この土佐をよく知り、愛し、土佐のことを描いた小説家はいないのではないか。もちろん田中貢太郎や浜本浩、そして司馬遼太郎なども土佐を土佐人を多く小説の素材とし、描きはした。だがつぶさに見れば田岡典夫に勝るほどとは言い難い。これは、ただただ田岡典夫の土佐への土佐人への愛着ゆえか。異郷にいて、また募る郷愁もあったことだろう。

浦戸湾・種崎は少年典夫の原風景

北山を背に美しい入り江とそこに浮かぶ島々、松林と白砂の種崎海岸、それは典夫にとっての原風景でもあった。

浦戸湾の風光を護るために、彼は昭和初期から湾に浮かぶ玉島（巣山）を所有してきた。その浦戸湾が、昭和三十五年頃から浦戸湾改修埋め立て計画によって東岸や北岸から埋め立て造成が始まる。湾口の狭島も爆破された。西岸に近い玉島周辺も埋め立て予定地となった。

その頃の典夫の苦悩は相当のものだったらしい。そして浦戸湾の風光が損なわれることへの悲しさは、やがて「高知の人々が承認」していることへの悲しみ、そして、あきらめへと変わってゆく。（結果的には、台風災害等で埋め立てと災害の因果関係が論じられるようになり、西岸の埋め立ては中断）。

母寿子を思う日記、そして羽毛入りみちゆきコート

「私はどんなに
母の希望を入れたかったか
私が信仰を持ち得て、
母の喜ぶ顔を見たいか
どんなに、私は――いやもう止める
母は既に逝ったのであった
私の今知れる限りで
最も正しい慈愛深い女たる
母は永へに世を去った」

一九二三年七月二十八日の田岡典夫の日記である。典夫の母、田岡寿子は、七月二十六日に帰らぬ人となった。一九一六年の父典章の死についで、彼は母をも失ったのである。

母寿子と典夫（大正8、9年頃か）

実をいえば、寿子は典夫の実母ではない。後年四十三歳になって、初めて生みの母佐久間はまに会うのである。そうして実の子でもない自分を、あれほどまでに慈愛してくれた母寿子にあらためて感謝をする。

このたびの田岡典夫展準備で、これまで収納したままでいて、展示に際して日をみはった遺品に、パリ遊学時代パリであつらえたオーバーコートや三つ揃いがあるが、もう一点、眺めているうちに次第に納得した遺品に「羽毛入りみちゆきコート」がある。おそらく、これは亡き母寿子の形見にちがいない。典夫にとって忘れがたい母の思い出の品ゆえにこそ、数十年を経ても典夫は、大切に保存してきたのだろう。展示後にあらためて感動した資料一品であった。

若き大原富枝、田岡典夫写真
昭和19年3月、今の五藤邸で中島鹿吉県立図書館長（右から2人目）らとともに。2人が野中婉書簡を見せてもらったのも、この前後のことだろうか。　大原富枝文学館蔵

「土佐」紹介の大恩人、田岡典夫

ふるさと土佐に、ほんの少し辛い思い出も秘める田岡典夫ではあったけれど、本当に彼は土佐を愛し土佐だけの小妖精シバテンを愛し、明るい土佐を土佐人を、その作品世界の中で紹介し続けてくれた。『小説武辺土佐物語』から『小説野

中兼山』に至るまで、いったい何百という土佐もの作品を書き、土佐を土佐人を広く世に紹介してくれたことだろう。だが、このふるさとからは、名誉県人の称号は勿論のこと、一基の記念碑、一片の感謝状も受けずに（むろん欲しがりもせずに）彼は逝った。たとえ、中央のマスコミが見落とそうとも、その顕彰碑がなくとも、その作品の質の高さは、わかる人にはわかる。その人格の高潔さは知る人ぞ知る。作家田岡典夫は、それで十分だったのだろう。

田岡作品の再読を

多くの方々に田岡典夫作品をもっと読み味わっていただきたい。そして、誠実な創作へのその姿勢と、その選び抜かれた言葉と、その小説の魅力を味わっていただき、さらに、自由を愛した野人の精神を汲みとってほしいと願う。

なお、田岡典夫の著作は殆どが絶版、入手は困難であるが、彼の名短編を収録した『高知県昭和期小説名作集　田岡典夫』（二八五四円）は入手可。（当館売店にもあり。）企画展図録『田岡典夫没後20年』（八〇〇円）とともに、是非ご一読をおすすめしたい。

（別役　佳代）

「高知県昭和期小説名作集田岡典夫」
2854円で販売中

「田岡典夫展図録」
800円で販売中

閲覧室から

『慈　雨』

安岡章太郎　著

「一気には降らない代わりに、霧かと思うほど細かい雨脚のシトシト雨が、小止なく降りつづく、まさにそういうものこそが、とりわけ旱天の慈雨であるに違いない。」著書のあとがきにはこう書かれている。

人々との出会い。奇縁、宿縁、機縁、因縁、合縁…。「縁」という巧まざる出会いの「妙」によって人々は支えられている。

そのような人々との出会いを大切に、著者は「縁」を「慈みの雨」ととらえ「慈雨」と題し、読者に贈っている。

小泉淳作『雲龍図』によって装幀された。本書には、一九六五年以降、各書誌に収録された作品の中から、想いのままに執筆された、余情豊かな名文四十四篇を抜粋。三部に構成、収録されている。

二〇〇二年六月三十日刊

㈱世界文化社

県内同人誌紹介

『ＯＮＬ』

一九九一（平成三）年三月、岡村励・山本衛の二名で発足した。爾来隔月刊行に努め、現在までに六二号を発行した。

幡多地域では唯一の詩誌であり、号を追うごとに、この地に新しい文学史を刻んでいるという自負も持っている。

詩作への意欲ある方ならどなたなりと出入り自由。いわば文学のお祭り広場と自称、過去のべ五十余名が名を列ねた。

現在常時三十数名が作品を寄せている。中でも長い詩歴の西森茂をはじめ、数名の障害を持つ詩人達には精神的支柱となっているのではと思う。俳句作品も掲載。

創刊以来表紙は田辺陶豊の抽象墨画が好評。誌名の由来は土佐は遠流の地を、シャレたつもりで洋風に。いずれ独りきりになればＹを加えＯＮＬＹに改名すると心密かに決めてはいるが、今のところ県内外からの参加希望もあり、Ｙの字は当分お預けとなっている。

発行所及び発行人

中村市双海二五七　　山本　衛

寅彦YEAR! REPORT

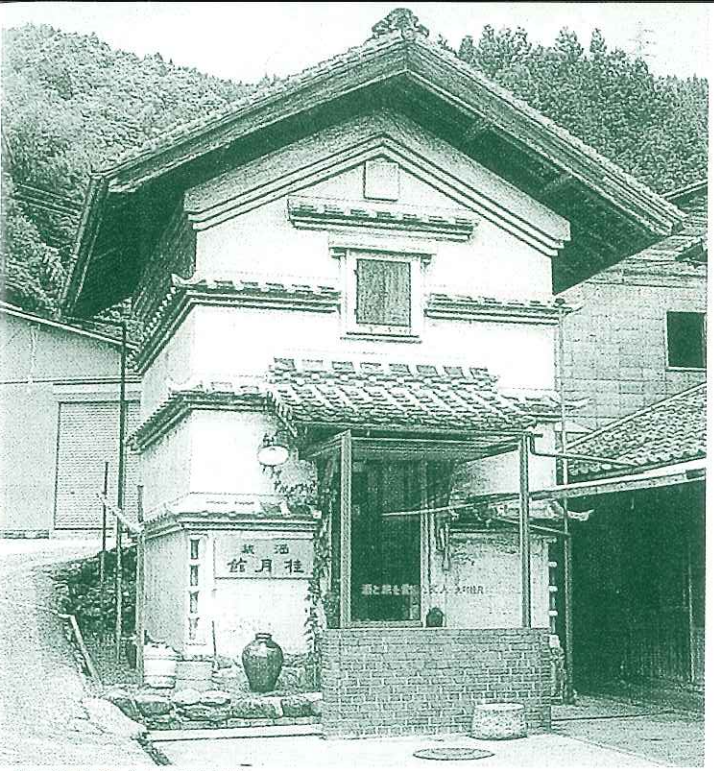
今年は、子どもたちにも寺田寅彦のようにいろんなことにチャレンジしてもらおうと、全六回の「寺田寅彦になろう！夏休み子ども教室」を開催しました。参加者は小学校四年生から六年生三十二名。恒石直和先生の授業では、寅彦も遊んだ高知城のまわりから寺田寅彦記念館までを歩き、自然観察。二回目の織田信生先生の授業では、自画像も何枚も描いている寅彦のように、自分自身を見つめる「絵画教室―自画像を描く」。映写機の前に立って壁に影をうつし、その影を縁取って等身大の自画像を描きました。三回目は鈴木堯士先生による「実験教室」。科学者としての寅彦について知るため、椿の花（模型）の落下実験や、対流の実験。最終日は、保護者同伴のバスツアー。住吉海岸で岩石などを見学したあと、芸西天文学習館で、発見した星に「トラヒコ」と名前もつけている関勉先生にお話を聞きました。あいにくの台風で、望遠鏡での天体観測はできませんでしたが、参加者からは「またこのような企画をしてほしい」との声もいただきました。寅彦さんについても楽しく学びながら身近に感じてもらえたようです。

土佐文学さんぽ 16

大町 桂月

大町桂月全集第一巻 序文より

文をだに作り居れば、暑さなく、寒さなく、心配もなく、不平もなし。失敗すれば失敗を文にし、艱苦に遇へば艱苦を文にし、逆境に陥れば逆境を文にして、余は文章に安心立命を得たりき。志大にして才疎に、愚鈍にして負嫌なる余の半生は、苦痛の歴史なるが、苦痛大なれば、大なるほど、文ますく妙也。苦痛に遇ふ毎に、これ天、我をして名文を作らしめむとするなりとさへ思ふに至りぬ、余に於ける文章の徳、嗚呼大なる哉。



桂月資料館（土佐町田井）

―桂月資料館を訪ねて―

大町桂月（一八九六―一九二五・現高知市永国寺町生まれ）といえば、与謝野晶子の詩「君死にたまふ勿れ」に噛みついた国家主義者、酒、尨大な紀行文を残した紀行作家の三つのイメージが浮かぶ。が、一般にはなんとなく、茫として捉えどころのない文人としてうつる。しかし時代を経ても隠れたファンはいるもので、土佐町田井の自宅に桂月資料館をつくった人物がいると聞いて、早速駆けつけた。

愛宕町→正蓮寺→工石山経由でわずか一時間の道のり。北山縦断のくねくね道は結構な二車線になっており、大豊町経由より三十分は短縮できるようだ。

館主澤田輝夫さん（土佐酒造株式会社代表取締役）は、予定通り到着したこちらを館前の路上でにこやかに迎えてくれた。大正年間に建てられた水切りのこぎれいな土蔵が館になっていた。一階、二階に所狭しと架けられた掛け軸を中心に、遺族から寄贈されたゆかりの品々、全国各地の碑の写真類…。桂月の人生の出発をあらわす起請文（妻長宛の一種の結婚申込書で、明治男の含羞と気構えが混交した一文）まであった。

「親父（澤田南海男・昭和六十年没）が桂月に傾倒していましてね。特に青少年向きの文（『学生訓』などの修養物を指す）に感銘を受けていたようで。昭和二十六年から仲間を集めて桂浜で供養祭をやりよりました。酒の名称もそれまでの〈花の友〉から〈桂月〉にかえたほどで。私もそんなことでごく自然に」なんと親子二代にわたる信奉者とは。ハンパじゃないその心意気に敬服しながらも、こちら、少々意地の悪い質問をぶっつけた。

「晶子の詩の件、桂月は『戦争を非とするもの夙に社会主義を唱ふるものの連中（略）国家の刑罰を加ふるべき罪人』と痛烈に批難しましたね。この一事で国家主義者桂月（明治義塾時代、頼山陽を崇拝、国粋主義者杉浦重剛に学んだ）のイメージが後世まで伝わって文学者としてはえらい損をしてますね。〝食わず嫌いの素〟になりますね」

澤田さんは明快な答えを用意されていた。

「日露戦争下、晶子は家族のことを考え、桂月は国家のことを考えていたのです。どちらがいいとかわるいとかを抜きにして、その事実を提供して、子供たちに考えさせたいのです」

吃音、近視のため軍人、政治家志望を断念した桂月は美文によって名を挙げ、小説を試み、硬派の評論で鳴らしたが、最後に紀行文に真骨頂を発揮した。その破格の鉄脚ぶり、旅エネルギーはほとんど日本全土、朝鮮、満蒙まで及んでいる。それに密着した尨大な紀行文（歌枕、事蹟をちりばめた日本の伝統的紀行文）は、こちらが数えるのにいやになるくらいの量である。ざっと一千篇はあろうか。生来の旅好きだけとはいいきれない、桂月の精神の深いところで相通ずるものが山河にあったというべきだろう。桂月についてのエッセイ（明治13号・明治大学・二〇〇二・一）で作家中沢けいは、サブタイトルに「日本を旅した男」と付しているほどだ。桂月は明治以降最初のプロの旅人ではなかったかとも思える。

桂月の書をもとにした碑は全国で七十二か所。終焉の地青森県だけで三十二か所あるという。澤田さんが碑を探索、写真におさめ、美しいカレンダーを制作しはじめて五年になる。「全部まわり終えるには、あと五、六年はかかります」

（国則三雄志）

見どころ＝●早明浦ダム●工石山陣ケ森県立自然公園●りんご園

交　通＝大豊ＩＣ→土佐町まで車で25分

資料受贈報告（平成十四年六月～八月）

敬称略

▼**安岡清**・「人間将軍　山下奉文　安岡正隆　光人社」▼**田所俊一**・「縁なるべし　済美集成　山本和昭　教育広報研究所」▼**川村友一**・「歌集　長江　―三国志の旅―　岡林清水　亜細亜書房」▼**高知県俳句連盟**・「土佐俳句歳時記　高知県俳句連盟編刊」▼**斉藤つぎ**・「想い出を散歩　斉藤つぎ著刊」▼**西岡寿美子**・「むかさり絵馬　西岡寿美子　二人発行所」▼**市原麟一郎**・「遠くから地鳴りがする　市原麟一郎　リーブル出版」▼**妻鳥季男**・「四国遍路八十八の本尊　櫻井恵武　日本放送出版協会」他▼**池澤忠夫・登志子**・「海の鼓動　池澤忠夫・登志子　そうぶん社出版」▼**松林朝蒼**・「句集　遠狭　松林朝蒼　花神社」▼**尾崎晴光**・「慶応長崎事件　司馬遼太郎　講談社」他▼**杉本恒星**・「句集　飛花落葉　杉本恒星　俳誌『壺』発行所」▼**森下一仁**・「魔術師大全　森下一仁　双葉社」▼**櫻井材**・「大町桂月・長屋秋香等関係資料」…**大町桂月**（一八六九～一九二五）は詩人、随筆家、紀行家、評論家で本名は芳衛。明治二年一月二十四日土佐藩士であった通と糸の三男として高知城下北門筋（高知市永国寺町）に生まれました。第一高等中学校（のちの一高）を経て二十六年帝国大学文科に入学。在学中から美文・評論に健筆を振るい、卒業の年である二十九年に詞華集『花紅葉』（共著）を、三

◆◆◆ 文学館日誌 2002年6月～8月 ◆◆◆

6月

◆1日 資料協力者（司馬遼太郎）沢田常則氏ご逝去。◆4日 高知県職員能力開発センター（障害者施設利用の為の視察）9名。◆8日 寺田寅彦専門講座②「地球を科学する寺田寅彦Ⅱ」。講師／鈴木堯士氏（高知大学名誉教授）。午後1時30分～午後3時。文学館ホール。49名。／和泉チエン（株）ご一同様観覧。35名。◆11日 高知県職員能力開発センター（障害者利用の為の視察）25名。◆12日 高知県職員能力開発センター（障害者利用の為の視察）14名。◆14日 高知県職員能力開発センター（障害者利用の為の視察）23名。／附属中学校1年生観覧40名。引率者3名。◆15日 第27回朗読の会。第1部「南の島の私だけの家」「葉桜と魔笛」、第2部「花と恋して」朗読劇「菅笠」。文学館ホール。午後2時～午後4時。参加者40名。◆21日 高知県職員能力開発センター（障害者利用の為の視察）16名。／附属中学校1年生観覧38名。引率者3名。／高知市立養護学校生観覧4名。引率者3名。◆22日 小夏の映画会「細雪」（1950年・新東宝）。第1回上映午前10時～。「谷崎潤一郎と『細雪』」講師／鈴木健司氏（高知大学教授）午後12時25分～午後12時55分。第2回上映午後1時～。文学館ホール。参加者計186名。◆23日 竜馬学園18名観覧。◆26日 高知県職員能力開発センター（障害者利用の為の視察）7名。◆28日 春季企画展「棟方志功」開幕。8月4日(日)まで。前期6月28日～7月17日、後期7月18日～8月4日まで。／附属中学校観覧40名。引率者3名。◆29日 紙芝居研究会例会。午後1時半～。◆30日 ビデオ上映会『彫る・棟方志功の世界』（カラー38分）。棟方展期間中毎日曜日（最終日のぞく）の午前11時～4回、午後2時～3回上映。文学館ホール。参加者42名。

7月

◆5日 附属中学校観覧40名。引率者3名。／吉井滋、彰氏ご来館。◆6日 棟方志功展記念講演会。午後1時30分～午後4時。文学館ホール。参加者約70名。「土佐に来た六頭身の阿修羅」講師／吉村淑甫氏（高知県立歴史民俗資料館前館長）、「板画家・棟方志功」講師／鍵岡正謹氏（高知県立美術館館長）。◆7日 ビデオ上映会『彫る・棟方志功の世界』。参加者33名。◆13日 寺田寅彦専門講座③「寺田寅彦と連句Ⅰ」。午後1時30分～午後3時。文学館ホール。講師／榊原忠彦氏。参加者50名。／火の鳥句会観覧20名。◆14日 ビデオ上映会『彫る・棟方志功の世界』。参加者42名。◆16日 第5回児童生徒文学作品朗読コンクール応募締めきり（当日消印有効）。◆17日 棟方志功展前期終了。一部展示入れ替え。◆18日 棟方志功展後期（～8月4日）開幕。◆20日 第28回朗読の会（棟方志功の世界）午後2時～午後4時まで。第1部「板画入門」「鬼門」、第2部「雪隠観音、倭絵となる」「飛天の美女たち」。文学館ホール。参加者40名。◆21日 ビデオ上映会『彫る・棟方志功の世界』カラー38分。文学館ホール。参加者46名。◆24日 「夏休みこども教室 寺田寅彦になろう！」①「寺田寅彦入門」講師／恒石直和氏（寺田寅彦記念館友の会会長）。午前9時～午後12時まで。文学館ホール。参加者29名。◆25日 「夏休みこども教室 寺田寅彦になろう！」②「寅彦文学さんぽ」講師／恒石直和氏。午前9時～午後12時まで。文学館ホール。参加者32名。◆28日 ビデオ上映会『彫る・棟方志功の世界』カラー38分。文学館ホール。参加者116名。／竜馬学園19名観覧。／NHK文化センター福山観覧48名。◆31日 「夏休みこども教室 寺田寅彦になろう！」③「絵画教室（自画像を描く）」講師／織田信生氏（絵本作家）。午後1時30分～午後3時30分。文学館ホール。参加者26名。／博物館実習始まる。

7／6
棟方志功展記念講演会

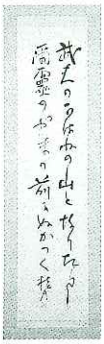
7／31
「夏休みこども教室寺田寅彦になろう！」絵画教室

8月

◆1日 「夏休みこども教室 寺田寅彦になろう！」④「絵画教室（自画像を描く）」講師／織田信生氏。午後1時30分～午後3時30分。文学館ホール。参加者30名。◆3日 寺田寅彦専門講座④「寺田寅彦と連句Ⅱ」午後1時30分～午後15時。文学館ホール。講師／榊原忠彦氏。参加者35名。◆4日 棟方志功展終了。期間中入館者約3324名。／博物館実習終了。◆20日 第5回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査大方会場。参加者140名。◆23日 第5回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査高知会場。参加者160名。◆24日 小夏の映画会「暁の脱走」（1950年・新東宝）。第1回上映午前10時～。「田村泰次郎と戦争文学」解説猪野睦氏。午後12時10分～50分。第2回上映午後1時～。文学館ホール。参加者250名。◆25日 紙芝居研究会例会。午後1時半～。◆26日 第5回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査安芸会場。参加者35名。◆28日 「夏休みこども教室 寺田寅彦になろう！」⑤「実験教室」。講師／鈴木堯士氏（高知大学名誉教授）。午後1時30分～午後3時30分。文学館ホール。参加者30名。◆29日 夏休みこども教室「野外実験遠足（バスツアー）」。講師／鈴木堯士氏、関勉氏。午後2時～午後10時。住吉海岸、芸西天文学習館。参加者71名。◆31日 第29回朗読の会。午後2時～午後4時まで。第1部「障害者の道作る開拓者に」「ヒトゲノムに関する基礎知識」「ひとり暮らし―ゆとり―」「雨の日に源氏を」第2部CD図書「夏の庭」「音声とは？」。文学館ホール。参加者45名。

十一年には『黄菊白菊』を刊行。その美文は当時の青年たちに熱狂的に迎えられました。三十二年「博文館」の招きにより入社し、文芸時評・各種評論・紀行・随筆などを精力的に執筆。硬派の評論家として高い評価をうけます。また『日本文明史』『東京遊行記』など数多くの著作を世に出してゆきます。博文館退社後は『伯爵後藤象二郎』などの評伝や国漢の注釈書を多数刊行。晩年は日本・朝鮮・中国東北地方などを巡遊して各地の名所旧蹟を世に紹介し『一蓑一笠』『行雲流水』などの本を出しています。大正十四年六月十日自らが最も愛した青森県十和田湖畔「蔦温泉」で死去。「**長屋秋香**」は日本画家で本名東二郎。大町桂月は秋香の母方の従兄弟に、また洋画家国澤新九郎は同じく父方の従兄弟に当たります。資料を寄贈下さいました櫻井材さんは秋香の長女でこれらの資料の中には大町桂月・長屋秋香に関する資料、また秋香の父長屋重名（海田）に関する資料も含まれ貴重な資料群となっています。総点数は一八四点。

このほか全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。



大町桂月書軸

高知県立文学館ニュース　第十八号　平成十四年十月一日発行　〒七八〇―〇八五〇　高知市丸ノ内一丁目一番二〇号　電話〇八八―八二一―〇二三一　FAX〇八八―八七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

2002年

10～12月

10月――October	11月――November	12月――December

講座等

文学カレッジ

〔平成14年度文学カレッジ〕 いずれも13：30～15：00まで、文学館ホールで
多彩な講師陣により土佐に関わる文学にふれていただきます。
◇１回目・11／９(土)　高橋　正氏「安岡章太郎の『流離譚』について」
◇２回目・12／14(土)　松本秀正氏「上林暁の人と文学」
◇３回目・１／12(日)　鈴木健司氏「宮沢賢治―土佐との関わり」
◇４回目・２／１(土)　小松弘愛氏「高知の詩人」
◇５回目・３／８(土)　榊原忠彦氏「鹿持雅澄について」
定員　50名　　申込受付　10月30日まで
〒住所、氏名、年齢、電話番号を記入のうえ、郵送で、または館受付までお申し込み下さい。

催しもの

寅彦YEAR！

●寅彦とシネマ
寅彦が愛した古きよき洋画を鑑賞するビデオ上映会。いずれも古典の名作ぞろいです。
◇10月20日(日)「商船テナシティ」
◇11月２日(土)「或る夜の出来事」
◇12月15日(日)「制服の処女」
◇１月19日(日)「三文オペラ」
★文学館ホールにて
★参加自由、入場無料
★定員／50名（当日先着）
★①11：00～　②14：00～

第５回 児童生徒文学作品朗読コンクール

◇県審査
＜日時＞11月24日(日)13：00～
＜場所＞文学館１階ホール
地区審査で選出された児童生徒の公開審査及び表彰式・記念講演会
◇記念講演会
「ぼくが作家になったわけ～ズッコケ三人組からのメッセージ～」
講師：那須正幹先生
（「ズッコケ三人組」の作者、児童文学者）

寅彦YEAR！

●寅彦の蓄音機を聴く
寅彦の蓄音機で寅彦が好きだった音楽のレコードを聴きます。

★11月16日(土)13：30～
★文学館ホールにて
★参加自由、入場無料
★定員／100名(当日先着)

寅彦YEAR！

●文学散歩
寅彦の文学の足跡をたずねてバスツアーを行います。
★11月30日(土)
★講師未定
★定員／50名
★募集期間／11月上旬～11月中旬

企画展示室

よさこい高知国体スポーツ芸術協賛事業
「田岡典夫 没後20年展」
―シバテンを愛し
土佐を愛した直木賞作家―
9／12(木)～10／14(月・祝)
田岡典夫自筆絵画や日記、パリ時代のコートや写真、関係作家の書簡など約200点を展示。
◆映画「色ごよみ権九郎旅日記」
ビデオ上映会
10／14(月・祝)　10：30～
定員80名（当日先着順）
「田岡典夫展」の観覧券でご覧いただけます。

●開館５周年記念特別展
「寺田寅彦展」
＜期間＞11／３(日)～
１／５(日)
当館所蔵資料を中心に、寅彦の生涯、とくに土佐での寅彦についてご紹介します。
＜料金＞一般550円、
高校生以下無料
＜場所＞文学館２階
企画展示室

● 関連企画 ●

● 記念講演会
★12月８日(日)
14：00～16：00
★文学館ホール
★定員／100名（当日先着）
★入場無料

● ギャラリー・トーク
★11／28(木)
12／21(土)
１／５(日)
各14：00～15：00
★２階企画展示室にて
★担当学芸員による解説

【休館日】10月――７, 15, 21, 28日　　11月――５, 11, 18, 25日　　12月――２, ９, 16, 24, 26～31日

利用案内

開館時間　午前９時～午後５時(入館は、午後４時30分まで)

休館日　毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～１月１日)

観覧料　一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。〔一般550円〕
20人以上の団体は２割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者１名は無料です。

駐車場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内

●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●ＪＲ高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
●バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館
高知市丸ノ内１丁目１－20
電話　088・822・0231
FAX　088・871・7857
e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/bungaku/
〒780-0850